
銀月の冒険者 一戦女神の加護を受けし者一

紅龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀月の冒険者 ―戦女神の加護を受けし者―

【Nコード】

N4332Y

【作者名】

紅龍

【あらすじ】

戦乱の中命を落とした小国の騎士カイゼルの魂は、戦女神ネメフエアの宮殿へ召喚された。生前の活躍、そして人間性がネメフエアに気に入られたカイゼルは褒美として自分がいた世界とは別の世界へ転生させてもらうことになった。カイゼルの第二の人生はどのようなものになるのだろうか。

プロローグ

とある小国の騎士、カイゼル・セグナムは戦場と化した自国の城の一室にいた。聞こえて来る剣戟、爆発音、怒号、悲鳴。そのいずれもが刻々と部屋へ近づきつつある。

「これまでか」

部屋の奥に据えられた椅子に腰掛けた男が呟いた。男の名はクリス・ヴァルハイド。この国の王だ。

「陛下。城を捨ててお逃げください。」

カイゼルは王の前に跪き、そう進言した。

「生き恥を晒せと申すか、カイゼル。」

「陛下さえ生き延びれば国は滅びませぬ！どうか どうかお逃げください。」

しかしクリスは首を横に振った。

「お前達や民を見捨てては行けぬよ。」

そう言うところクリスは立ち上がり腰の剣を抜いた。

「妻も息子も逃がすことができた。私がいなくても立派に後を継いでくれるぞ。」

「 分かりました。」

次の瞬間、クリスの左右に控えていた騎士がその両腕を拘束した。

「!?!?お前達何をする!」

突然の騎士達の行動にクリスは狼狽えた。だが、誰もそれに答えない。半ば抱えられるようにしてクリスが連れて来られたのは、部屋の最奥にある隠し通路の前だった。

「待て!私は逃げないと言ったはずだぞ!」

なおも抵抗するクリスの前に、カイゼルは再び跪いた。

「無礼をお許してください。ですが陛下にはどうあっても生き延びていただきたいのです。」

「カイゼル」

クリスを連れた騎士と、何人かの兵士が隠し通路の先へと進んでゆく。そして扉が閉ざされる間際

「陛下、貴方のような方に最期までお仕え出来たことを誇りに思います。どうかご無事で。」

そう言いながら、カイゼルは静かに微笑み頭を下げたのだった。

しばらく頭を下げたまま動かなかったカイゼルが振り返る。剣戟の音は先程よりも更に近くに聞こえるようになっていた。

「さあ、行こうか。」

決意を込めてそう口にしたカイゼルは、剣を抜き放つと部屋を後にした。その姿を見つめていた者がいたことに、彼は最期まで気づくことはなかった。

戦女神の神殿にて

クリスを逃がした後のカイゼル達の戦いは凄惨なものだった。味方は次々と倒れ、カイゼルも遂に力尽きる。彼が最期に見た光景は、自分の喉元に槍を突き立てる敵兵の姿だった。

「ここはどこなんだ？」

深淵に沈んでいた意識がゆっくりと浮上し、目を覚ましたカイゼルの第一声がそれだった。意識を手放している間に、辺りの状況は一変していたのだ。掃除の行き届いた部屋、センスの良さを感じさせる調度品、そして自分が横たわったベッドに敷かれた清潔感溢れる白いシート。先程まで自分がいたはずの血生臭い戦場とはかけ離れた平和な光景に、カイゼルの頭は混乱した。

「私は残った兵達と共に戦って死んだはず」

カイゼルは喉元に手をやった。そこには敵兵に槍で突かれた致命傷があったはずだが、跡形もなく消えている。それどころか全身にあった傷が綺麗に消え失せていた。

「傷は消えているが、あれだけの傷では助かるはずもない。だとすればここが天国なのか」

カイゼルがそうつぶやきながら辺りを見回していると、

「カイゼル様、お目覚めでしょうか」

控え目なノックと共に、部屋の外から女性の声が聞こえてきた。

「ああ、今日が覚めた」

聞き覚えのない声に、警戒しつつもカイゼルは応えた。

「失礼いたします」

返答後すぐに部屋へと入ってきた女性を見て、カイゼルは目を丸くした。現れたのは貴族の家で働く使用人が着るようなメイド服に身を包んだ女性だった。短めに切り揃えられた美しい黒髪に整った顔立ち。文句無し美人だ。だが、本来耳があるはずの場所には斜め上に向かって一対の黒い角が伸び、深い紅色をした瞳は、瞳孔が猫のように縦に長かった。

「君は」

驚きを隠さぬままのカイゼルの口からそんな言葉が漏れていた。

「申し遅れました。私、戦女神様にお仕えいたしております獣精霊、ディーナと申します」

透き通るような美しい声で自己紹介をした獣精霊ディーナは、微笑みながら優雅に一礼した。

謁見

死んだと思ったのに目覚めれば見知らぬ部屋で、現れた女性は戦女神に仕える精霊だという。短時間に様々な事があり過ぎて、カイゼルの頭はパニック寸前だった。

「突然のことで混乱されておいでのようですね。宜しければカイゼル様の現状をご説明いたしますが？」

カイゼルが混乱しているのを察したのか、ディーナがそう提案してくる。

「ああ、頼む」

状況が全く掴めないカイゼルはディーナから話を聞くためにベッドを抜け出し、部屋に置かれていた椅子に腰掛けた。

「かしこまりました。まず現状の説明をさせていただきます。今いるここは戦女神メフェア様の宮殿、そして、カイゼル様は既に魂だけの存在となってここに存在していらっしやいます」

「つまり私はもう死んでいるんだな」

ディーナの言葉で、カイゼルは自身がすでに死んでいることを再確認した。

「残念ながら。亡くなった方の魂は本来であれば天界へ向かい、そこで次の輪廻を待つこととなります。ですがカイゼル様の場合、少々特殊な状況となっております」

「特殊な状況　とは？」

「カイゼル様の魂は、天界へ向かう前にネメフェア様に召喚されたのです」

戦女神ネメフェアはカイゼルがいた世界でも信仰のある女神だ。戦女神の名の表すように、戦を司り戦士を守護する女神として主に兵士や騎士、冒険者達に崇拜されていた。

「騎士にとっては光栄な事だが、なぜ私は召喚されたんだ？」

心当たりが全くないカイゼルは首を傾げた。

「その点は私にも分かりかねます。これからネメフェア様に謁見していただきますので、そこで聞かれるのが宜しいかと」

「お会いできるのか!？」

突如として告げられた事実にかイゼルは驚愕した。

「カイゼル様が目を覚まされたら連れてくるように指示されております。早速ですが謁見の間までご案内いたしますので、ご同行願えますか」
「分かった」

カイゼルが椅子から立ち上がると、ディーナが扉を開けた。

「こちらです」

部屋を出て、広い廊下をディーナを先頭に進んで行く。しばらく歩くと前方に一際大きな扉が見えてきた。

「こちらが謁見の間でございます」

ディーナがその扉の横に立って、そう告げた。どうやら案内はここまでようだ。カイゼルはディーナに促され、扉を開けた。

「貴方がカイゼルですね」

扉の先、ディーナが謁見の間と呼んでいた広間にある玉座に腰掛けた美しい女神は、優しい笑みを浮かべながらカイゼルを迎え入れた。

戦女神の眷族（前書き）

一話一話がちょっと短いですね。
次からはもう少し長くします。

戦女神の眷族

玉座に座ったネメフェアを目にしたカイゼルは、彼女の神々しさに思わず跪いた。白い肌、蒼玉色の瞳、腰まである長い黒髪。女神に相応しい美しさだった。

「畏まらないで楽しんで下さい」

そう言うとネメフェアは立ち上がり、カイゼルに歩み寄る。彼女の身体を包む純白の鎧が、その動きに合わせて軽い金属音を立てた。

「この度の戦、見させてもらいました。良い働きでしたね」

ネメフェアはカイゼルの肩に手を置きながら、労いの言葉をかけた。

「身に余る光栄にございます」

極度の緊張に包まれながら、カイゼルは頭を下げる。そして、疑問に思っていた事を尋ねてみた。

「しかしながらネメフェア様。なぜ私のような者の魂を召喚なさったのですか？今回の戦、私などよりも活躍した者達が数多くいたでしょうに」

カイゼルの問いに、ネメフェアは首を横に振った。

「戦果を上げたという点においては確かにそうかもしれませんがね。ですが私が貴方を召喚したのは、貴方の戦場での行動に胸を打たれたからです。」

「私の 行動？」

首を傾げるカイゼルに、ネメフェアはゆっくりと頷く。

「貴方は戦の中、自分の仕える王を助けるために逃がしましたね。その後の戦いでも自ら先頭に立って仲間を守るうとした。なかなかできる事ではありません」

「自分が仕える王や仲間達を助けたい、守りたいと思うのは当然だと思つのですが」

カイゼルの言葉を、ネメフェアはやんわりと否定した。

「思つていても、それを行動に移すことは難しいのです。ましてや負の感情が露わになる戦場では特に。だからこそ、他人のために行動できる貴方に会つてみたいと思つたのです。」

「それが私を召喚なさつた理由なのですね？」

だが、ネメフェアは再度首を横に振つた。

「それもありますが、貴方を召喚した真の理由は他にあります」

「真の理由 ですか？」

カイゼルの問いかけにネメフェアは頷いた。

「そうです。貴方を召喚した真の理由は、貴方を私の眷族に迎えるためなのです」

そう言うと、ネメフェアはどこか悪戯っぽい笑顔を浮かべたのだつた。

異世界の旅にご招待!?

「私が　ネメフェア様の眷族に　？」

「不満ですか？」

覗き込むようにしながらネメフェアはカイゼルに問いかける。

「いえ！そのようなことはあるはずもございません！ただ、私のよ
うな者がネメフェア様にお仕えできるなどとは夢にも思っておりま
せんでしたので　」

ネメフェアの眷族になる、つまりはネメフェアに仕え、共に働くとい
うことだ。そのような大役を任されるとは思っていなかったカイ
ゼルは驚愕していた。

「私の眷族になるということは輪廻の輪から外れ、永い刻を私と共に
歩むということ。下界には二度と転生できません。それでも引き
受けてもらえますか？」

「はい！謹んでお受けいたします」

カイゼルは即答し、深々と頭を下げた。人として二度と下界の地
を踏めない悲しみよりも、ネメフェアのために働ける喜び、誇らし
さの方が勝っていた。

「引き受けてくれますか。ありがとうございます。さて、戦場での活躍と今回
の眷族の件もあります。貴方には褒美を取らせなければなりません
ね」

「とんでもございません！お仕えできるだけでも充分過ぎる栄誉に
ございます。この上褒美など、頂けません」

「遠慮はいりません。受け取ってくれないと困ってしまいます」
「ですが」

なおも断ろうとするカイゼルを見て、ネメフェアは笑みを浮かべた。

「褒美といつても、それほど大した物ではありません。貴方を転生させるだけのことから」

「転生ですか？しかし先程、もう転生はできないと」

「そうです。先に話したように私の眷族になる者は二度と転生する事はなくなります。ですから最後の転生を褒美として与えるのです。私のために働くのはその転生後の人生を終え、再びここに戻って来た後でかまいません。どうぞでしょう、受け取ってもらえますか？」

「ネメフェア様　ありがとうございます」

二度と転生できないと覚悟していたカイゼルは、喜んでネメフェアの褒美を受け取る事にした。

「受け取ってもらえますか。では、転生をするにあたって希望があれば聞いておきましょう」

「希望ですか？」

「本来の転生では転生先は選べません。ですがこれは私から貴方への褒美です。裕福な家に産まれたいと言えば叶えますし、他にも希望があれば極力それに沿うようにしましょう」

ネメフェアにそう言われたカイゼルは暫く考えた後、自分の希望を口にした。

「それでは、今私が持っている剣の腕、技術、知識を残したまま転生させていただけますか？」

「それだけ　ですか？貴方が望めば一国の王の子供に転生して、

楽に暮らすこともできるのですよ？」

「元より金や権力にそれほど執着がないのです。ですが、剣は幼い頃より修練を積み身につけた私の全て。できれば忘れずにいたいと思ひまして」

カイゼルの言葉に、ネメフエアは苦笑した。

「欲のない人ですね。分かりました。ですがその願いを叶えた場合、転生は赤子からではなくある程度成長した状態からになります。さらに転生後は身寄りのない、天涯孤独の身になってしまいますが構いませんか？」

「それは構いませんが 理由を聞いても宜しいでしょうか」

「精神衛生上仕方ないのです。貴方の希望である剣の腕、技術、知識を残して転生させた場合、今の自我を残したまま転生する事になります。そのまま赤子として転生すれば、今の自我を持ったまま授乳や排泄の世話を受けることになってしまつのです」

ネメフエアの話聞いて、カイゼルは赤子になつた自分が母から乳をもらつたり、おしめを換えてもらつ姿を想像してしまつた。

「確かに それは耐え難いですね」

「分かつてもらえましたが？もう一つ、転生後は天涯孤独の身となつてしまう理由ですが、転生後の家族関係の構築がかなり難しくなつてしまつたためです。成長した状態で転生したとして、そこで初めて会うことになる自分の肉親といきなり良好な関係を築けますか？」
「なるほど、難しいでしょうね」

赤子として転生すれば問題はないのだろうが、成長した状態で下界に生を受け、いきなり『これが貴方の家族です』と言われても戸惑うだけだろう。

「他に聞きたいことはありますか？」

「いえ、もう大丈夫です」

頭を下げるカイゼルに、ネメフエアはもう一度尋ねる。

「本当にそれで良いのですか？もっと楽な人生にする事も可能なのですよ？」

「身寄りがないのは確かに大変そうですが、それで構いません。何にも縛られず、自由気ままに生きてみるのも面白そうですしね」

カイゼルはそう言うと、楽しそうに笑った。

その刃の名は（前書き）

だいが間を置いてしまいました

その刃の名は

「本当に貴方は無欲ですね　分かりました。では準備を始めましょう」

そう言いながら、ネメフェアはカイゼルの頭に手を置いた。その手が青白い光を帯びる。

「！？これは　」

ネメフェアの手が輝き出すと同時に、カイゼルの頭の中に膨大な情報が入り込んできたのだ。

「今頭の中に入って来ているのは、貴方がこれから転生する世界に必要な言語、通貨、習慣などの情報です。赤子からの転生ならば成長するにつれて学習できるのですが、今回はそういうわけにはいきませんから。ところでカイゼル、魔法は知っていますね？」

「はい。私が居た世界にも魔法がありました。私は魔力を持っていなかったので使えませんでした」
「では、魔力も付加しておきましょう」

情報の流入が終わると同時に、カイゼルの体の中に今まで感じたことがない感覚の力が入ってくる。

「これが　魔力　」

「そうです。常人より少し強い魔力を与えておきます。これで貴方も魔法が使えるようになりますよ」

全ての作業が終わり、ネメフェアがカイゼルの頭から手を離れた。

「さて、次が最後の準備です」

ネメフエアが指を鳴らすと、彼女の背後に銀色の扉が揺らめきながら現れた。

「さあ、入りなさい」

ネメフエアに促され、カイゼルはその扉を開けた。

「これは!？」

扉を開けた先は広い部屋になっていた。そして部屋一杯に整然と並べられているのは剣や槍、鎧などの武具の数々。

「この中から貴方が気に入った武具を一つ選びなさい。それを貴方に授けましょう」

「!？ですがそれは」

断ろうとするカイゼルを、ネメフエアはゆっくり手で制した。

「断らないでくださいね。貴方の要望は欲がなさ過ぎてこちらが心苦しくなってしまう。このくらいの事はさせてください」

「分かりました。遠慮なく受け取らせていただきます」

そう言うとカイゼルは手近にあった剣を手に取ってみた。非常に凝った造りの柄、鋭い輝きを放つ刀身、価値を知らない者が見ても一目で良いものだと分かる。見回してみれば、並べられた武具はどれもがなかなかの逸品ぞろいということが見て取れた。その一つ一つを手に取り、または眺めながら見て回るカイゼル。そして、その

中の一振りがカイゼルの目に留まった。

「これは」

カイゼルの目に留まったのは、両刃の長剣だった。緻密な彫刻が施された柄頭や鍔、刀身は特殊な金属を使っているらしく、漆黒の輝きを放っている。だがカイゼルの目を引いたのはその刀身の表面、稲妻のように無数に走る亀裂だった。ただの亀裂ではないようで、うっすらと青白い魔力を纏わせている。

「変わった剣に目を付けましたね。その剣は魔剣、ヨルムンガンド。ある魔族の鍛冶師が打った剣です。使い方を教えましょう。剣を持ってみてください」

言われるままに剣を手にしたカイゼルは、その余りの軽さに驚いた。

「剣を持ったまま、アンロック開封と唱えてみてください。頭の中で思うだけでも良いのですが、最初は口に出した方が良いでしょう」

カイゼルは頷くと、言われたとおりの言葉を口にしてみる。

アンロック
「開封」

カイゼルがそう口にした瞬間、刀身に劇的な変化が現れた。

そして新たな世界へ（前書き）

お待たせいたしました

そして新たな世界へ

刀身に走っていた亀裂に沿って、剣がバラバラと崩れ始めたのだ。みるみるうちに刀身は複数の破片になって、カイゼルの足下に散らばった。

「ネメフェア様　これはいったい　？」

戸惑うカイゼルを見て、ネメフェアは楽しそうに笑った。

「壊れたわけではありませんよ。破片をよく見てみなさい」

カイゼルが足下の破片に目を凝らすと、破片同士を繋ぐ青白い糸のような光に気づいた。光は破片の全てを繋ぎ合わせ、柄元まで続いている。一続きに連なったその形状は、剣の名のとおり蛇のようだが、一般的な形状とは違って、カイゼルはその形に見覚えがあった。

「これは　鞭ですか」

「その通り。鞭としても使える魔剣、それが世界蛇のもう一つの姿です。使いこなすにはそれなりの技量が必要ですが、便利でしょう？」

カイゼルが感触を確かめるように剣を振るう。

「破片を繋いでいるのは魔力で構成された糸、魔導糸です。細いですが非常に頑強ですし、貴方の意志である程度の伸縮も可能です。伸びると念じてみてください」

カイゼルが念じてみると、魔導糸はカイゼルの意志に反応してすると伸びた。

「逆に縮めと念じれば糸は縮みます。剣に戻したければ封刃ロックと唱えてください」

「なるほど 封刃ロック」

カイゼルが言葉を発すると、破片は瞬く間に元の長剣の形に戻っていった。

「気に入りましたか？」

「はい。この剣にしようと思います。」

「分かりました。では鞘を用意させましょう。ディーナ」

「お呼びでしょうか」

ネメフェアの呼び掛けに、音もなく部屋のドアを開けて現れたディーナが応える。

「この剣に合った鞘を用意しなさい」

「かしこまりました。カイゼル様、鞘を見繕って参りますので剣をお借りします」

ディーナはカイゼルから世界蛇を受け取ると、一礼して部屋を出ていった。

「さあ、準備もこれで全て終わりました。後は貴方を転生させるだけ。最後に聞いておきたいことはありますか」

ネメフェアの問いかけにカイゼルは少し逡巡したあと、口を開いた。

「聞いても良いものか迷いましたが、一つお聞きしても良いでしょうか」

「何でしょう」

「王は クリス陛下は無事に逃げる事ができたのでしょうか」

「 貴方が戦場で逃がしたあの王ですね？」

「はい。無事に逃げ切れたのか、それだけが気がかりでした」

あの時王を逃がした隠し通路は城外まで続いており、出口も複数ある。しかもそのどれもが巧妙に擬装されていた。逃げ切れる可能性は高い。が、確実ではない。カイゼルはネメフェアの言葉を待った。

「安心しなさい。彼等は無事に逃げ切りましたよ」

ネメフェアのその言葉に、カイゼルの身体から力が抜けた。

「そうですか これまで心残りはなくなりました」

カイゼルはそう言つと、どこか晴れやかな表情を見せた。

「お待たせいたしました」

ちょうどその時、ディーナが世界蛇を手に戻つて来た。

「カイゼル様、剣をお返しいたします。どうぞ」

ディーナから渡された世界蛇は、細部の金具まで手抜きのない造りをした漆黒の鞘に収まっていた。カイゼルはそれを腰に提げる。

「さあ、それでは貴方を転生させましょう。その方陣の中に立つて

ください」

カイゼルが方陣の中心に立つと、方陣全体が輝き出した。

「ではカイゼル、良い旅を」

「ネメフェア様、ありがとうございました」

そして方陣が更に輝きを増すと、カイゼルの意識はゆっくりと輝きの中に飲み込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4332y/>

銀月の冒険者 一戦女神の加護を受けし者一

2011年12月19日16時49分発行